

《研究ノート》

アウグスタ＝エメリタの創建とその影響

— アウグストゥス帝期のイベリア半島南部 —

桑 山 由 文

はじめに

筆者は、近年、ローマ帝国支配下におけるギリシア文化圏の変容について研究を進めてきている。その過程で、初代皇帝アウグストゥスによる東部属州諸都市へのかかわりが、これらの地域の以後の史的展開に大きな影響を与えたことに注目するようになってきた。アウグストゥスによる植民市の創設や入植者の派遣、都市への建築物贈与などの行為は、ギリシア本土の伝統あるアテネや、小アジアのアレクサンドリア＝トロアスといったさまざまな都市のあり方を変え、しばしば周辺地域の歴史に画期をもたらしたのである¹⁾。

しかしながら、アウグストゥスによるこうした属州への関与は、当然ではあるが、東部のギリシア文化圏だけではなかった。帝国全体を見渡し、東部の状況と比較検討していくことが必要となろう。そこで本稿では、その前段階として、帝国西部、とりわけ、古くからローマが属州として支配し、かつ、アウグストゥス自らが深く関与したイベリア半島に目を向ける。その中でも、彼が前 25 年という、権力を握ってから比較的早くに建てたローマ植民市アウグスタ＝エメリタに焦点をあてる。この都市の創建は、周辺地域にいかなる影響を及ぼしたのか。現存する遺構を紹介しつつ、アウグストゥス帝期における属州都市の変容の一端を明らかにする。

1 アウグスタ＝エメリタの創建

1-1 カンタブリア戦争とアウグスタ＝エメリタ

イベリア半島は、周知のように、第 2 次ポエニ戦争の後、その東部から南部にかけてが共和政ローマの支配下に入り、前 2 世紀初頭にはヒスパニア＝キテリオルとウルテリオルの 2 属州が設置された。ローマ植民市コロニア＝ユリア＝アウグスタ＝エメリタ（以下、エメリタ）は、アウグストゥスによって、前 25 年、ウルテリオルのトゥルドゥリア地方に建てられた。現在のスペイン、エストレマドゥーラ地方のメリダにあたる。

エメリタ創建のきっかけは、アウグストゥスによるカンタブリア戦争である。イベリア半

島東部から南部にかけての地域は、フェニキア人やギリシア人が古くから植民市を建設していたこともあり、先住民の間でも都市化が進んできていた。ローマによる支配も前1世紀後半には安定したものとなっていた。しかし、北西部のカンタブリア、アストゥリア地方は半島中部の高原地帯を挟んで地理的に隔てられており、ローマ支配も及んではいなかった。この地に対してアウグストゥスは、前26年自ら遠征し、少なくとも6個軍団に達する大兵力を投入した²⁾。

カンタブリア人、アストゥリア人の抵抗は根強く、戦争は長期化した。アウグストゥス自身は期待した戦果を挙げられず、後方のタッラコに下がり、最終的には前19年に、彼の右腕にして娘婿であったアグリッパがローマに勝利をもたらした。これにより、ローマは鉱物資源の豊富な北西部を掌握し、イベリア半島全体を初めて支配下に置いたのであった³⁾。

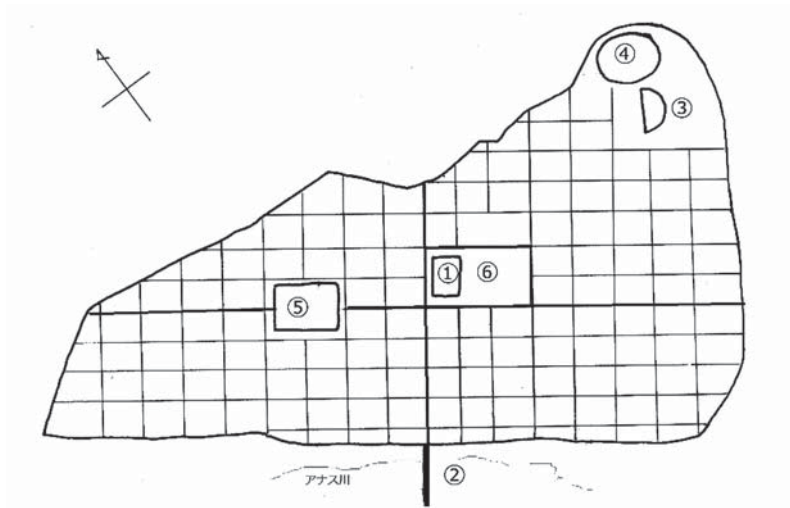
戦争初期には、ローマ側が戦いを有利に進めており、終結は間近と思われていた。そこでアウグストゥスは、兵士たちのうち老齢の者の退役を許可し、彼らを入植させてアウグスタ＝エメリタを建設したのである⁴⁾。これら退役兵たちが所属していたのは第5軍団アラウダエと第10軍団ゲミナで、都市建設をアウグストゥスから任されたのは、カンタブリア戦争で功績を挙げたプブリウス・カリシウスであった⁵⁾。なお、ストラボンが、エメリタを他の都市と並べて、συνφικισμέναιと表現していることから考えると、後述のコルドウバのように、この地域の先住トゥルドゥリア人も同時に移住した可能性がある⁶⁾。

創建から数年してカンタブリア戦争が終結すると、アウグストゥスはイベリア半島の統治体制の再編成に着手した⁷⁾。新たに征服した北西部をキテリオルに加えて皇帝管轄属州のタッラコネンシスとする一方、ウルテリオルを元老院管轄属州のバエティカと皇帝管轄属州のルシタニアに分割した。このうちタッラコネンシスは3個軍団が駐屯する皇帝属州となり、コンスル格の元老院議員が総督として派遣されたが（さらにユリウス＝クラウディウス朝期に1個軍団まで減少）、バエティカとルシタニアには正規軍団は駐屯しなかった。両属州の総督はいずれもプラエトル格の元老院議員であった⁸⁾。

この再編でエメリタは属州ルシタニアの州都とされたが、それだけでなく、ルシタニアを三分する司法管区（conventus iuridici）のうちの一つ、エメリタ管区の中核市ともなった。次節では、創設当初からユリウス＝クラウディウス朝末までのエメリタの、都市としての発展とその特徴を見ていく。

1-2 エメリタのかたち

エメリタは、イベリア半島南部を東から西に流れた後、南下して大西洋に注ぐアナス川（現グアディアナ川）の流域に建設され、城壁の内側の都市域は面積80ヘクタールとルシタニア最大であった（**地図1**参照）⁹⁾。アナス川には全長800メートル、64のアーチからなる大橋が架けられ、市内と直接結ばれていた。この橋は現在でも修復を繰り返しつつ使用されており、実際に渡ってみると、その長さは実に鮮烈な印象を抱かせる（**写真1**参照）。お



地図 1

エメリタ都市域 ①「ディアナ神殿」 ②大橋 ③劇場 ④闘技場 ⑤「属州フォルム」 ⑥フォルム



写真 1

そらく古代では、現在以上に強いインパクトを人々に与えたであろう¹⁰⁾。

都市の街路はローマ植民市によく見られるように、南北の軸のカルド・マクシムスと東西の軸のデクマヌス・マクシムスが直角に交わるつくりで、交点にはフォルムが建てられ、都市の主神殿（写真 2 参照）が置かれた¹¹⁾。この神殿は、現在かなりの部分が残存しており、「ディアナ神殿」の通称で呼ばれている。だが、この名称に根拠はなく、実際に祭られてい



写真 2

た神格は不明である。ここからは、人物を特定することはできないもののローマ皇帝の像が出土しており、神殿が何らかの形で皇帝崇拝に関連していたことははっきりしている。ただし、皇帝崇拝に用いられたのはティベリウス帝期以降になってからで、建設時点の本来の用途ではなかったらしい。

エメリタの特徴は、創建初期から、都市インフラが十分に整備されていたことである。都市の外側、東側の城壁に接した一角に、劇場と闘技場が隣り合わせに次々と作られた¹²⁾。まず劇場は、前述したアグリッパからの恩恵によるもので、都市創建のわずか数年後に建築が始まった¹³⁾。カンタブリア戦争終了直後、属州再編とほぼ同じ前 16/15 年に奉献されたが、完全にできあがっていたわけではなく、工事は続いたらしい。この劇場は現在も保存状態が良く、壮麗なフロンス・スケナエがかなり形をとどめていて名高い（写真 3 参照）。現在もアグリッパの名を記した碑文を見ることができる。もっともこの碑文は、改築によって本来の場所から動かされたらしいが、見えやすい位置に飾られ続けたことから、アグリッパの名がエメリタで重要視され続けていたことが窺える¹⁴⁾。

一方、闘技場の建設は、劇場より少し遅れる。だが、アウグストゥスその人によって寄贈され、前 8/7 年頃に落成した¹⁵⁾。ただし、劇場と同様に完成はもっと後であったようである（写真 4 参照）。水の供給についても、当初からアウグストゥスの名を関する水道が整備されていた。その後、遅くとも 1 世紀半ばまでにはさらに二つの水道ができあがった¹⁶⁾。

アウグストゥスの死後、ユリウス＝クラウディウス朝期にもエメリタでの建築活動は活発に続き、様々な公共建築が作られていった。早くもティベリウス帝期には、闘技場の近くに



写真 3



写真 4

競走場が作られた¹⁷⁾。さらに、都市域の北西部には、第二のフォルムである通称「属州フォルム」が作られ、新たに、ローマのコンコルディア神殿に似せた神殿が中心的存在として建てられた¹⁸⁾。ここからはティベリウス帝やコンコルディア女神、ドミティアヌス帝らへの奉献を示す多くの碑文が発見されており、第一のフォルムと異なって最初から皇帝崇拜の中心

的施設として計画されていたと推測されている。このフォルムは、現在も見ることのできる通称「トラヤヌスのアーチ」を入口として持ち、第一のフォルム周辺から区別された地区を形成した。

さらにクラウディウス帝期からネロ帝期にかけては、第一のフォルムの東側に、通称「大理石のフォルム」が付け足された¹⁹⁾。1980年代に発掘された出土物の検討が進み、近年、このフォルムには、アエネアスが父アンキセスと息子アスカニウスを連れてトロイアを脱出する様子を描いた彫像群やローマ建国の祖ロムルス像が置かれ、アエネアスについての短詩(elogium)も飾られていたことが判明した。このような特徴から、「大理石のフォルム」は、首都ローマの「アウグストゥスのフォルム」を模倣して作られ、「属州フォルム」と同じく皇帝崇拝のために用いられていたと考えられている。

このようにエメリタは、創建時からアウグストゥスとアグリッパという帝国中央の最高権力者たちから格別の好意を受け、きわめて早い時期から「最先端」の都市たることを意図されていた。皇帝崇拝もすぐに導入され、アウグストゥス死後も彼の一族との関係を喧伝する都市であった。

なお、旧来の研究では、エメリタの建築物の大半を深く考えることなくアウグストゥス帝期に置く傾向があった。近年こうした認識は修正され、本稿で述べた通り、エメリタでの建築活動はユリウス＝クラウディウス朝、さらにはフラウィウス朝やトラヤヌス帝期までの長いタイムスパンで捉え直されるようになってきている²⁰⁾。その結果、現代の研究者によるアウグストゥス帝期の意義の評価は相対的に低下しているようであるが、これは裏を返せば、エメリタが長期にわたって「最先端」都市であったことを意味している。W. Trillmichは、エメリタをローマ期ヒスパニアで「もっともアウグストゥス的」な都市と呼び、この建築理念は創建期から根づいていたものの、現実の建築活動が追いつかず、ユリウス＝クラウディウス朝後半になって多くが実体化したのではないかと指摘している²¹⁾。

実はエメリタ管区の気候はイベリア半島の中でかなり厳しいものであり、本来、エメリタ周辺は人口もわずかであったようである²²⁾。では、皇帝自らがここまで手厚い配慮をして都市を創建した背景には何があったのか。それはエメリタの地政学的重要性に尽きる。アウグストゥスは、カンタブリア戦争の舞台である半島北西部へのコミュニケーションを向上させるため、半島南西部から北上するルートを整備した。これは鉱物資源や兵員の輸送にも好都合であった。後世のいわゆる「銀の道」Camino de la Plataの原型である²³⁾。エメリタとその大橋の創建は、このルートを横切って交通を妨げていたアナス川の畔に、恒常的渡河点を作ることとなった。

加えて、エメリタからみて北方70キロと西方30キロにはそれぞれ、ノルバとメテッリヌムという、既にアウグストゥス帝期より前にコロニア格を得ていた都市が存在していた²⁴⁾。この二都市はいずれも規模は大きくなく、地理的にも隔たっていて、交流は乏しかった。しかし、エメリタが結節点として両都市の間に入ったことで、三都市間の流通網が形成されて

いった²⁵⁾。こうして、半島北西部と南西部を結ぶルートが、エメリタという安定的な中継点を得て、本格的に成立したのである。

エメリタの「最新」インフラもこのような視点から理解できるのではないか。これらは、ローマ文化に馴染んだ人々に上質の暮らしや娯楽を提供するものであった。住民の核である退役兵が快適な生活を過ごし、エメリタが都市としてうまく定着することこそ、アウグストゥスには重要だったのであろう。そして、立地の重要性とそれに伴う経済的豊かさとは、都市景観のさらなる整備をエメリタにもたらしたのである。

このように、アウグストゥスの覚えめでたき「最先端」都市が、イベリア半島南部に創建され、ローマ的都市景観を継続的に成長させていったことは、周辺地域に大きなインパクトをもたらした。それは、エメリタより南東の、古くからのローマ植民市コルドゥバに見ることができる。次章ではこの点について、まずはアウグストゥス帝期までのコルドゥバの史的变化遷を概観した上で、論じていく。

2 コルドゥバの変容とエメリタ

2-1 ローマ共和政期のコルドゥバ

コルドゥバの歴史は、前2世紀半ばにまでさかのぼる。元老院議員マルクス・クラウディウス・マルケッルスにより、トゥルデタニア地方のパエティス川中流に建設された。ストラボン『地理誌』によれば、住民は「ローマ人と地元民の両方から選ばれた」²⁶⁾。元々この地域には、同じパエティス川を少々下がった右岸、現在の Parque Cruz Conde 付近に先住のトゥルデタニア人のオッピドゥムが存在した。その住民の一部と、ローマ軍の退役兵関係の人々（ローマ市民あるいはイタリア人だけではなく、彼らと先住民女性との間の子どもまで含んだ可能性がある）とが合同したと考えられている²⁷⁾。「コルドゥバ」という名も先住民の言語に由来したらしい。

建設の詳細な時期については、マルケッルスがヒスパニア＝キテリオルおよびウルテリオルの総督であった前169/168年とする説と、キテリオル総督であった152/151年とする説とがあり、論争が続いている²⁸⁾。また、創設時はラテン権都市であったと一般にみなされているが、はっきりした証拠があるわけではない²⁹⁾。

パエティス川流域は肥沃な地域であり、コルドゥバより先にすでに前206年にスキピオ・アフリカヌスによってイタリカ市が建設されており、また古くから先住民が築いていた都市ヒスバリスもあった。加えて、シエラモレナ山脈の豊富な鉱物資源を押さえやすい位置にあったことも、コルドゥバの富の源であった³⁰⁾。こうした立地条件から、コルドゥバは前1世紀に入ると、総督が長期滞在する、ウルテリオルの州都的存在へと成長した³¹⁾。

文献史料からも、この時期には、バシリカのあるフォルムが既に存在していたことや、ローマ市民から成る協議会（*conventus civium Romanorum*）が存在したことなど、ローマ都

市的要素を窺うことができる³²⁾。CORDUBA の銘を持つ貨幣も発行された³³⁾。

ただ、この頃のコルドゥバがいかなる性格の都市であり、どの程度の規模であったのかなど詳細は分らない。共和政末の内乱期には、ポンペイウス側のウルテリオルにおける根拠地となり、ムンダの戦い後にカエサルに攻められて 22,000 人の市民が殺害されるなどの被害が出たことが知られ³⁴⁾、考古学調査でもその破壊の痕跡は発見されるらしい³⁵⁾。しかし前 44-43 年にはあいかわらず当時の総督ガイウス・アシニウス・ポッリオが滞在する属州中心都市であり、壊滅的被害を被ったわけではなかったとも考えられる³⁶⁾。このように不分明な点が多いのであるが、近年の諸研究が一致して指摘するところでは、この頃になってもコルドゥバでは、ローマ的慣習は広く受け入れられていなかった³⁷⁾。創建から約 150 年を経ても、いまだローマ風都市とは言い難い状況だったのである。

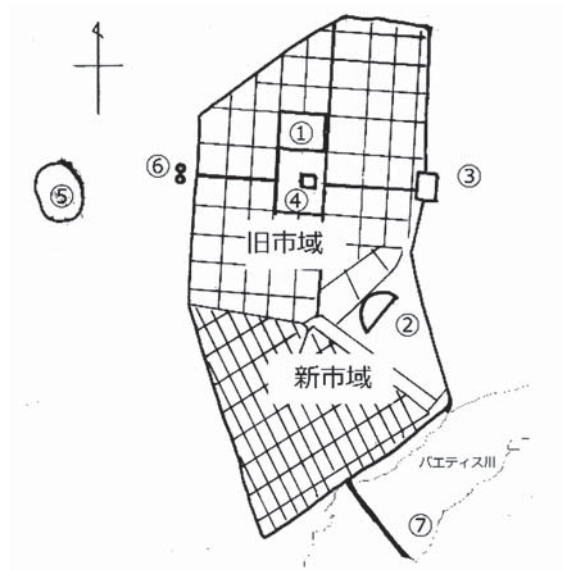
2-2 アウグストゥスの属州再編とコルドゥバの変容

ところが、アウグストゥス帝期に入ると、状況は著しく変化した。前章で述べたアウグストゥスによる属州再編では、コルドゥバは新属州バエティカの州都とされ、コルドゥバ司法管区の中心都市にもなった³⁸⁾。加えて、おそらくこの頃までにはコルドゥバはコロニア格を得、正式にはパトリキアという名となった³⁹⁾。ただし時期を特定できる証拠はなく、R.C. Knap はカエサルがこの地域を平定した後に付与したとみなすが、A. Ventura や A. Jiménez らは、アウグストゥスの属州再編と結び付けて考えるなど、研究者の間でも一致しない⁴⁰⁾。

アウグストゥス帝期には、コルドゥバの都市としてのかたちも大きく変わっていった。城壁は南へと大きく拡張され、都市域は共和政期の 2 倍弱になると同時に、南辺がバエティス川に広く接するようになった（地図 2 参照）。川には橋も架けられ、現在まで使用され続けている（写真 5 参照）。コルドゥバは、バエティスの水運の恩恵を、それまでよりも直接、受けるようになったのである。これにより、主要な港市であるヒスパリスおよび大西洋岸のガデスとのつながりが以前にもまして密となった。シエラモレナ山脈の豊富な鉱物資源や、オリーブやブドウ酒といったバエティス川流域の農作物の積出港としての役割が、共和政期よりも大幅に強化されたのである⁴¹⁾。

都市域の拡大の理由の一つは都市人口の増加にあると考えられている。前 18～前 2 年に発行された貨幣に軍団のシンボルが描かれていることから、カンタブリア戦争終結後に退役兵が新たにコルドゥバに植民してきたと推測されているのである⁴²⁾。旧来の市民の所属トリブスはセルギア区である一方、これら新しい入植者はガレリア区に登録されたと考えられている⁴³⁾。なお、碑文史料からは、コルドゥバにフォルム街区 (vicus forensis) と ヒスパニア街区 (vicus Hispaniensis) という二つの街区が存在したことが判明しており、このうちヒスパニア街区の方は、新しい都市域に存在した可能性が高い⁴⁴⁾。

さらに、アウグストゥス帝期以降、都市内の街路は舗装され、水道や泉が整備されていっ



地図 2

コルドウバ都市域 ①共和政期以来のフォルム ②劇場 ③市庁舎横の神殿 ④新フォルム
⑤闘技場 ⑥大円形墓 ⑦橋



写真 5

た⁴⁵⁾。公共建築物も大幅に整備され、都市景観も壮麗なものになっていった⁴⁶⁾。おそらくアウグストゥス帝期末には、前節で述べた共和政期のフォルムに隣接して、新しいフォルム (forum adiectum) が作られた⁴⁷⁾。この新フォルムには、首都ローマのマルス＝ウルトル神

殿によく似た神殿が建てられ、全高3メートルのアエネアスカロムルス巨像が置かれていたらしい。完成はクラウディウス帝期に入ってからと考えられている⁴⁸⁾。

劇場も、アウグストゥス帝期末、新しい都市域の北辺において、拡張前の城壁があった部分の自然地形を利用して建設が始まった⁴⁹⁾。これも新フォルムと同じように、1世紀半ばに完成したらしい。半円部の直径125メートルと、当時のヒスパニアで最大級のものであった。現在では、博物館地下に遺構の一部が保存されている。

闘技場については、剣闘士競技関係の碑文が多数出土するなどしたため、存在したこと自体は早くから確認されていたものの、遺構自体は見つかっていなかった。近年、その一部とみられるものが都市西側の城壁外の地域から発見された。Jiménez と Carrillo によれば、これはユリウス＝クラウディウス朝期に入ってから作られ、劇場と同じく、ヒスパニアの既知の闘技場の中では最大で、30,000人収容のものであったらしい⁵⁰⁾。

ところで、現在のコルドバでもっとも目立つローマ時代の遺構は、市庁舎の隣にある神殿の遺構である（写真6参照）。基礎部分は80メートル×60メートルで、闘技場と同じくアウグストゥス帝期より後になってから、城壁の一部を利用して建てられた。祭られていた神格については不明だが、皇帝崇拝に用いられたと考えられている⁵¹⁾。しかも、この神殿と城壁に結合して競走場が東に延びるように作られているという、壮大な複合建築であった可能性も近年主張されている⁵²⁾。ただし、正確な建築年代は分かっておらず、クラウディウ



写真6

ス帝期からフラウィウス朝期の間で議論がある⁵³⁾。付言すると、この神殿が属州フォルムの一部であったと見る説もあるが、一方で、共和政期のフォルムからカルド・マクスィムスに沿って旧新市域の境界まで南下した地域を属州フォルムとする見解もあり、意見は分かれている⁵⁴⁾。

興味深いことにこうして作られた建築物の多くは、首都ローマを強く意識したものであった。周知のように、アウグストゥス帝期のローマ市では、セルウィウス城壁の内側、つまり共和政期以来の都市域において「カエサルスのフォルム」の完成や「アウグストゥスのフォルム」の新設により、元のフォルムが拡張された。一方、城壁外では「マルスの野」の開発が進み、南部のマルケッルス劇場から北部のアウグストゥス墓廟まで、さまざまな壮麗な大理石の建築物が立ち並ぶようになっていた。前述したコルドゥバの新フォルムと劇場は、それぞれ、首都ローマの「アウグストゥスのフォルム」とマルケッルス劇場とを模倣したものであったことで研究者の見解は一致している⁵⁵⁾。

このような側面は、死生観にも及んでいた。都市の西門を出たところには、前1世紀末に道路を挟んで二つの大円形墓が作られており、現在でも見ることができる(写真7参照)⁵⁶⁾。この道路は前述の闘技場へと通じており、多くの都市住民が通り過ぎることが確実な場所であった。死後もこのように眺められることを望む心性は、アッピア街道に沿って並ぶ首都ローマの墓群を彷彿とさせる。Jiménezらは、首都ローマのアウグストゥス墓廟との類似を指摘するが、アウグストゥス墓廟は城壁外とはいえ、アウグストゥスが大規模開発し、建築物が立ち並ぶようになっていたマルスの野に建てられており、性格が異なる。むしろ、共和

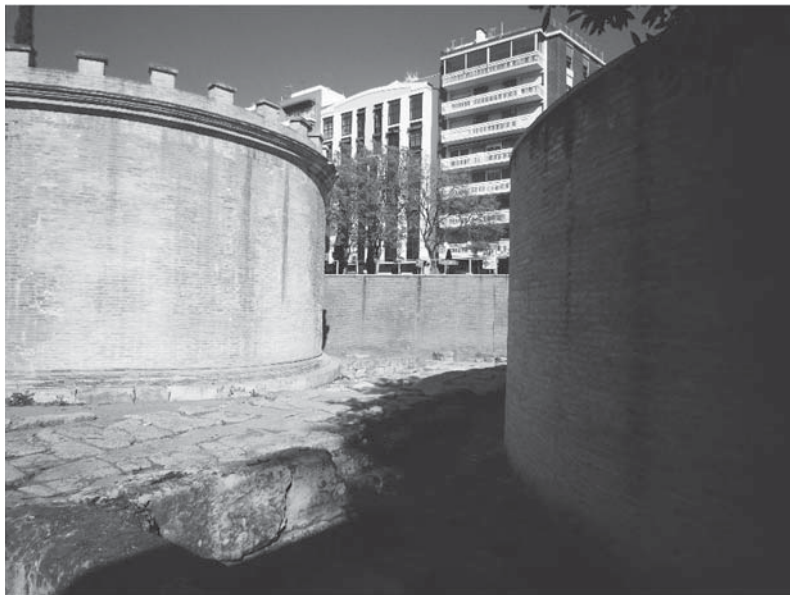


写真7

政末期に建てられた、アッピア街道のカエキリア＝メテッラの墓に類似しているのではない。いずれにせよ、ここからは、ローマ的価値観がコルドゥバのさまざまなレベルにまで及んでいたことが分かる。

このようにコルドゥバは、アウグストゥス帝期以降、とくにユリウス＝クラウディウス朝期半ばまでに、首都ローマのさまざまな建築物を模倣した都市へと全面的に変わっていった。ストラボンの『地理誌』もその様子について、「名声と力の双方で最も大きく成長した（下線部は筆者による補い）」と述べている⁵⁷⁾。Jiménez らは、これをもってコルドゥバの「第二の創建」とさえ言う⁵⁸⁾。この時期のコルドゥバから、首都ローマで弁論家として活躍し、模擬弁論の作品集を著した大セネカ、さらにその息子である小セネカから多くのラテン文人が現れたのは、こうしたコルドゥバの変容の必然的結果といえる。

それにしても、古くに創建されたコルドゥバが、なぜアウグストゥス帝期以降、これほど急速にローマ文化を積極的に採用していったのか。帝国各地のローマ植民市が元首政期において、首都ローマを模倣し、「小ローマ」となる傾向を持っていたこと自体はゲッリウス『アッティカの夜』でも語られており、周知の事実である⁵⁹⁾。その背景には、属州総督などの中央から派遣されたローマ政治支配層による、上からの関与や、ローマ中央からの恩恵を期待する地方都市支配者層の思惑などがあったことも夙に知られている。だが、そうした帝国全体に普遍的な事由に加えて、コルドゥバの人々に影響を与えた別の大きな要因として考えられるのが、第1章で述べたもう一つの「小ローマ」エメリタの創建である。

2-3 エメリタとコルドゥバ―二つの「小ローマ」―

エメリタとコルドゥバはともに「小ローマ」ではあったが、その過程は微妙に異なっている。注目すべきは、エメリタは前25年の創建当初からこうした性格を皇帝一族の直接関与で持っていたのに対し、コルドゥバでは少し遅れて、アウグストゥス帝による属州再編後しばらくしてから建築活動が活発化し、皇帝一族の直接関与が知られていないということである。コルドゥバは、コロニア格を得たのは共和政期の可能性があっても、「小ローマ」を指向するようになったのは、アウグストゥス治世後半、後1世紀に入ってからとの印象を受ける。

ここで考慮に入れるべきは、エメリタがバエティス川流域と地理的に密接に結びついていたという点である。エメリタが属州再編後にルシタニア州都とされたことから、先行研究は、この都市をルシタニアという枠組みに置き、ルシタニア内の他地域との関係を考察する傾向が強い。しかし、本来、エメリタはウルテリオルの一都市として創建されたのであった。大プリニウスや、ほぼ同時代の地理学者ポンポニウス・メラによると、エメリタがその畔に立つアナス川は、ルシタニアとバエティカとの境界線であり、エメリタは、（後の）バエティカと隣接していた⁶⁰⁾。すなわち、エメリタは、行政区分的にはルシタニアに属すが、地理的にはバエティカの一部と言っても過言ではない位置にあったのである。しかも、エメリタの

支配領域は、アナス川を越えて、川の南岸にも及んでいた⁶¹⁾。

さらに、アウグストゥス帝期以降の、イベリア半島における道路網の急速な発達が、この「近さ」に拍車をかけた。アウグストゥスは、北東部のタッラコから東部の海岸部を通り、バエティカに至るウィア＝アウグスタの建設を開始した。彼の治世中には、既にこの道路はコルドゥバを経由して、大西洋岸のガデスにまで到達していた⁶²⁾。前節で述べたバエティス川水運への直接接続と相まって、陸上交通面でもコルドゥバは、トゥルデタニア地方のみにとどまらず、イベリア半島北東部からの物資も流れ込む、一大集積地としての役割を担うようになったのであった。そして、周辺の二つのコロニアであるアスティギ、ヒスパリスとともに、イベリア半島内で最も経済的に豊かな地へと発展していった。

エメリタは、前章で述べた「銀の道」を通じて、この最富裕地域へと深く結びついていった。エメリタの大橋から市外へ伸びる道路は、コルドゥバ近くのコロニアであるアスティギへと直接通じており、前述のメテッリヌムを経由すれば、コルドゥバへの交通も容易であった。実際、ストラボンは『地理誌』において、(エメリタがある地方の)トゥルドウリア人と(コルドゥバがある地方の)トゥルデタニア人とが同じ種族なのかどうかという議論を紹介し、最終的に自身の時代には両者の間にはいかなる違いも見られないとまとめており、両地方の近い関係がみてとれる⁶³⁾。前述のポンポニウス・メラも、エメリタがルシタニアに属すとしつつも、コルドゥバ、ヒスパリス、アスティギと並べて説明しており、これらの都市が一体的なまとまりを持っていたことを窺わせる記述となっている。当然こうした両地域間の親近性は、アウグストゥスによる属州再編で消滅したとは考えにくく、以後も継続したと見るのが自然である。

コルドゥバの「小ローマ」化も、この文脈で考える必要があるのではないか。エメリタがアウグストゥス肝いりで当時「最先端」の都市として創建され、ルシタニアの州都と位置づけられたこと、以後も彼やその一族から厚く遇されたことは、同じ地域的まとまりの中にある、バエティス川流域の他都市にも大きな刺激を与えたであろう。とくにバエティカの州都として定められたコルドゥバは、ルシタニア州都であるエメリタへの対抗意識も強かったと考えられる。これが、コルドゥバによる急速なローマ的価値観の受容の背景にあったのではないか。単純に首都ローマを模倣しただけではなかったのである。

Trillmich は、カンタブリア戦争が前 25 年には順調だったため、アウグストゥスは、エメリタ創建で、自身の下での戦争終結と平和の到来をイベリア半島の人々に喧伝しようとしたと主張した⁶⁴⁾。長大な橋も「アウグストゥスの平和」のシンボルとしての性格が強かったのだとする。つまり、帝国東部でアクティウム海戦勝利を記念して建設したニコポリスの西部版がエメリタだというのである。しかし、カンタブリア戦争の舞台は、半島南部からかなり離れた北方地域であり、当時の人々がこの戦争と結びつけて考えるのが自然とは思えない。また、ニコポリスと異なり、都市内にも戦争と関連するモニュメントは発見されていない。とはいえ、エメリタが周辺への「広告塔」として機能したという Trillmich の指摘は、「広

告」の対象は異なるものの、筆者の主張にも合致するのである。ローマ期イベリア半島に関する従来の研究関心は、先住民によるローマ文化の受容やその結果としての都市化の実態に向けられてきており、日本でも研究蓄積がある⁶⁵⁾。ローマ植民市についても、先住民社会へ与えた影響が強調されてきた。だが、同じローマ植民市間での影響の程度もまた考慮に入れることで、当該地域の変容の実際により深く迫ることができるのではなかろうか。

おわりに

以上のように、本稿では、エメリタがイベリア半島の「小ローマ」とでもいえる都市として創建され、そのことが、バエティカの州都コルドゥバというもう一つの「小ローマ」の出現への大きな刺激となった可能性を指摘した。アウグストゥスによってウルテリオルは属州バエティカと属州ルシタニアに分割されたが、そのことを過度に強調するべきではない。以前のウルテリオルという枠組みで眺める必要もあるのである。

このような視点は、ユリウス＝クラウディウス朝期末の68年、タッラコネンシス総督ガルバが対ネロ反乱に成功し、新皇帝となる過程をいかに理解するかにもかかわってくる。58年からルシタニア総督であったオトは、ガルバに味方し、その勝利後は、政権中枢に入った。オトは、ポッパエアをめぐるネロとの確執の結果、ルシタニアへ総督就任という口実で左遷され、それを恨みに思っの反乱参加であった⁶⁶⁾。

本稿が指摘した、エメリタとコルドゥバとの「近さ」を念頭に置くと、オトがガルバの対ネロ反乱に協力したことには、単にタッラコネンシスとルシタニアの総督が手を組んだ以上の意味があったといえる。エメリタに主として滞在したオトは、10年間という総督としては異例の長期在職中に、コルドゥバからバエティス流域の人々との交流も密になっていたであろう。彼は総督として住民から高い評判を得ていた。このようなオトの存在は、ガルバが最富裕属州の一つバエティカの諸都市の支持を得ることにもつながったのである⁶⁷⁾。

注

- 1) 桑山由文「クインティリウス一族とローマ帝国中央」『京都女子大学大学院文学研究科紀要 史学編』15, 2016年, 1-16頁。同「ローマ元首政期におけるアテネの変容」『ヨーロッパ・グローバル化と諸文化圏の変容 研究プロジェクト報告書IV』(東北学院大学オープン・リサーチ・センター), 2011年, 317-325頁。
- 2) G. Alföldy, Spain, *Cambridge Ancient History*, X, 2nd ed., Cambridge, 1996, 453.
- 3) ローマによるイベリア半島支配の歴史については、阪本浩「古代のイベリア半島」『スペイン史1』(山川出版社, 2008年), 433頁が詳しい。本稿も属州全体の概観など大いに依拠している。
- 4) Cassius Dio, 53, 26. 1; P. Le Roux, *L'armée romaine et l'organisation des provinces ibériques d'Auguste à l'invasion de 409*, Paris, 1982, 69-72. 本村凌二「アンダルシア遺跡紀行」, 同編『ローマ帝国と地中海文明を歩く』(講談社, 2013年), 184-202頁も、現在のメリダ遺跡群について旅行者の視点から記しており、参考になる。
- 5) J. Rich, *Cassius Dio, the Augustan Settlement*, Warminster, 1990, 161.

- 6) Strabo, 3. 2. 15. なお、エメリタがそれまで集落のなかった土地にまったく新しく建てられたのかや、トゥルドゥリア人が創建時にどの程度関与していたのか等については A. M. Canto の問題提起とそれを受けての議論がある。A. M. Canto, *Las tres fundaciones de Augusta Emerita*, in W. Trillmich / P. Zanker, (Eds.), *Stadtbild und Ideologie: Die Monumentalisierung hispanischer Städte zwischen Republik und Kaiserzeit. Internationales Kolloquium. Madrid 1987*, München, 1990, 289-297; S. Panzram, *Stadtbild und Elite: Tarraco, Corduba und Augusta Emerita zwischen Republik und Spätantike*, Stuttgart, 2002, 231-233; B. Goffaux, *La vie publique des cites dans l'Occident romain*, Rennes, 2016, 286-287.
- 7) Alföldy, op. cit., 451-452.
- 8) Strabo, 3. 4. 20.
- 9) J. Edmondson, "A Tale of Two Colonies": Augusta Emerita (Mérida) and Metellinum (Medellín) in Roman Lusitania, in R. J. Sweetman (ed.), *Roman Colonies in the First Century of their Foundation*, Oxford and Oakville, 2011, 33.
- 10) この橋はエメリタ建設と同時に作られたとみなされているが、正確には都市建設の前後どちらなのかなど議論がある。W. Trillmich (tr., C. Nader), *Colonia Augusta Emerita, Capital of Lusitania*, in J. Edmondson (ed.), *Augustus*, Edinburgh, 2009, 465. (なお、この Trillmich 論文は基本的には W. Trillmich, *Colonia Augusta Emerita, die Hauptstadt von Lusitanien*, W. Trillmich / P. Zanker, (Eds.), *Stadtbild und Ideologie: Die Monumentalisierung hispanischer Städte zwischen Republik und Kaiserzeit*, München, 1990, 299-316 の英訳であるが、元のドイツ語論文を一部修正し、補遺も付されているため、本稿では 2009 年版を用いる)。橋の威容については、本村、前掲書、196 頁。
 なお、本稿の写真は全て筆者撮影。
- 11) Trillmich, *Capital*, 443-445; Panzram, op. cit., 243-245.
- 12) 従来、これらは最初から城壁の内側に作られたと無条件に考えられてきた。だが最近になって、フラウィウス朝に劇場と闘技場を囲い込むように変更されたことが分かってきた。Edmondson, *Two Colonies*, 37. なお、劇場と闘技場の構造の詳細については、R. M. Durán Cabello, *El teatro y el anfiteatro de Augusta Emerita: Contribución al conocimiento histórico de la capital de Lusitania*, BAR International Series 1207, Oxford.
- 13) Trillmich, *Capital*, 439.
- 14) Edmondson, *Two Colonies*, 35.
- 15) D. Fishwick, *The Imperial Cult in the Latin West. III. Provincial Cult. 3. The Provincial Centre; Provincial Cult*, Leiden and Boston, 2004, 66-67.
- 16) Edmondson, *Two Colonies*, 35; J. S. Richardson, *The Roman in Spain*, Oxford, 1996, 139. なお、現在も名高いミラグロス水道橋はこの一部である。
- 17) Edmondson, *Two Colonies*, 36.
- 18) D. Fishwick, *Precinct, Temple and Altar in Roman Spain*, Farnham, 2017, 9-133; Id., *Provincial Centre*, 44-59; Edmondson, *Two Colonies*, 36.
- 19) Trillmich, *Capital*, 450-460, 466; Panzram, op. cit., 246-251; Fishwick, *Provincial Centre*, 59-65; Edmondson, *Two Colonies*, 39.
- 20) たとえば Edmondson, *Two Colonies*, 37-38.
- 21) Trillmich, *Hauptstadt*, 299; Id., *Capital*, 465-466.
- 22) Edmondson, *Romanization and Urban Development in Lusitania*, in Th. Blagg and M. Millett (eds.), *The Early Roman Empire in the West*, Oxford, 1990, 154; Goffaux, op. cit., 286. もっともエメリタ周辺は土地は比較的肥沃であったらしい。
- 23) Alföldy, op. cit., 455; Goffaux, op. cit., 299.
- 24) Plinius, *Naturalis Historia*, 4. 22. 117.
- 25) Edmondson, *Two Colonies*, 38-47 が、エメリタとメテッリヌムの交流の密接さについて詳しく論じている。
- 26) Strabo, 3. 2. 1.

- 27) A. Ventura, P. Leon, and C. Marquez, Roman Cordoba in the Light of Recent Archaeological Research, in S. Keay (ed.), *The Archaeology of Early Roman Baetica*, Journal of Roman Archaeology, Supplementary Series, no. 29, Portsmouth, 1998, 95; A. Jiménez and J. R. Carrillo, Corduba/Colonia Patricia: the Colony that was founded twice, in Sweetman (ed.), *op. cit.*, 56; R. C. Knapp, *Roman Córdoba*, Berkeley, 1983, 11-12.
- 28) Polybius, 35. 2 によれば、マルケッルスは前 152/151 年冬にコルドゥバに滞在した。創設時期に関する議論については、Jiménez and Carrillo, *op. cit.*, 55-58 が詳しい。
- 29) Knapp, *op. cit.*, 11-12; A. T. Fear, *Rome and Baetica*, Oxford, 1996, 37-38.
- 30) Ventura et al., *op. cit.*, 91.
- 31) Pseudo-Caesar, *Bellum Hispaniense*, 3.1; Knap, *op. cit.*, 16-20.
- 32) Pseudo-Caesar, *Bellum Alexandrinum*, 52.
- 33) Ventura, et al., *op. cit.*, 91.
- 34) Ps. Caesar, B. Hisp. 34. Ventura et al., *op. cit.*, 92 らは、当時のコルドゥバの人口を 1 万 5 千人ほどと見積もる。
- 35) Jiménez and Carrillo, *op. cit.*, 59.
- 36) Cicero., *Epistulae ad familiares*, 368 (10・31).
- 37) たとえば Fear, *op. cit.*, 15 et 171; Jiménez and Carrillo, *op. cit.*, 59.
- 38) Knapp, *op. cit.*, 27-29; Alföldy, *op. cit.*, 452. 司法管区は、皇帝崇拜も担当した。パエティカでは他にアスティギ、ヒスパリス、ガデスに設置された。
- 39) Plinius, *Naturalis Historia*, 3. 1. 10.
- 40) ポンペイウス支配期にコロニア格を得たという説もあるが、Knap により明確に否定されたので、本稿もそれに従う。なお、本稿では、混乱を避けるため、便宜上、この時期以後も「コルドゥバ」と表記する。
- 41) Alföldy, *op. cit.*, 458-459.
- 42) Ventura, et al., *op. cit.*, 92; Knap, *op. cit.*, 29; Fishwick, *Provincial Centre*, 72ff. この新しい入植については、貨幣の図柄以外に明確な証拠は存在しないものの、大半の研究者によって事実と認められている。
- 43) Panzram, *op. cit.*, 146-147.
- 44) Fishwick, *Provincial Centre*, 72ff. なお Knap, *op. cit.*, 13-14 や Fear, *op. cit.*, 214-215 は、この二つの街区が都市創建時の「ローマ人」居住地域と先住民居住地域とを指していると考えたが、近年は否定されている。
- 45) もっとも、Valde puentes 水道の建設を Ventura et al., *op. cit.*, 94-95 はアウグストゥス帝期とするが、もっと後と考える者もあり、確定的ではない。
- 46) Jiménez and Carillo, *op. cit.* 59-67.
- 47) Ibid., 60; Fishwick, *Provincial Centre*, 79-83.
- 48) もっとも Ventura et al., *op. cit.*, 96 はこの像の存在についてのみ言及し時期を特定しない。
- 49) Ventura et al., *op. cit.*, 95, 101-107; Fishwick, *Provincial Centre*, 101-103. もっとも、Jiménez and Carillo, *op. cit.*, 60 は、前 5 年より前に建設の可能性も示唆する。
- 50) Jiménez and Carillo, *op. cit.*, 60.
- 51) Ventura et al., *op. cit.*, 96; Fishwick, *Provincial Centre*, 90-101.
- 52) Jiménez and Carrillo, *op. cit.*, 60. 従来、競走場は都市外の西部地域に存在した可能性が指摘されていた (Ventura et al., *op. cit.*, 97)。
- 53) クラウディウス帝期とするものには Ventura et al., *op. cit.*, 96. フラウィウス朝期とするものに Jiménez and Carrillo, *op. cit.*, 60.
- 54) Jiménez and Carrillo は前者で、Fishwick と Ventura らは後者。
- 55) たとえば Jiménez and Carillo, *op. cit.*, 60; Fishwick, *Provincial Centre*, 101-102.
- 56) Jiménez and Carillo, *op. cit.*, 63.
- 57) Strabo, 3. 2. 1.

- 58) Jiménez and Carillo, *op. cit.*, 60.
- 59) Gellius, *Noctes Atticae*, 16. 13. 8-9.
- 60) Pomponius Mela, 2. 3. 3. 88; Plinius, *Naturalis Historia*, 3. 1. 6; 4. 22. 115.
- 61) Goffaux, *op. cit.*, 305-307.
- 62) *ILS* 102; Strabo, 3. 4. 9; Alföldy, *op. cit.*, 454.
- 63) Strabo, 3. 1. 6.
- 64) Trillmich, *Capital*, 427-428.
- 65) 本村凌二「属州バエティカの都市化と土着民集落」『西洋古典学研究』30, 1982年, 78-107頁。
志内一興「ローマ支配下ヒスパニアの都市法典－法律の中の都市イメージ」『地中海学研究』25, 2002年, 93-111頁。
- 66) 左遷されるオトに同情し、赴任先をルシタニアとするようネロ帝に働きかけたのは、コルドゥバ出身のセネカであった (Plutarchus, *Galba*, 20)。セネカはエメリタの「小ローマ」ぶりを充分分かっていたのであろう。
- 67) オトの総督としての高い評判については、例えば Tacitus, *Historiae*, 1. 3. 13. なお、当時のバエティカ総督はガルバを支持せず、殺害された (A. R. Birley, *Baetica in the Roman Empire: the View From Rome*, in S. Keay (ed.), *op. cit.*, 238-239)。それゆえ、ガルバにとって、オトは、バエティカの人々との仲介役として貴重であったろう。

本稿は、科学研究費基盤研究 (B)「古代ギリシア・ローマ史における新しい「衰退論」構築に向けた統合的研究の試み」(研究代表者：南川高志, 研究課題番号 26284114) による研究成果の一部である。